

ふたりだけの二人

池田真也

「ふたりだけの二人」の企画意図

池田真也

1982年には約50万人だったフリーターが、20年後の現在、約200万人と4倍に増えています。これほど多くの若者が社会を拒んでいるのです。従来の価値観が通用しなくなった時代になりました。子供たちの学力は低下し、教師の多くが生徒の意欲がないと言います。長引く不況で倒産やリストラが相次ぎ、高学歴でも将来は保証されないことに若者たちは気づいてしまったのです。そして彼らのうちの多くが享楽だけを追い求め、生きる目的も見つけないことができず、虚しさの中をさまよっています。

若者たちは刹那的だと言われます。未来が明るいとは思えない。だったら今がよければそれでいいと・・・。

しかしそれが彼らの本心なのでしょいか。私にはそうは思えません。彼らの多くが「自分はこれからどうやって生きていくのか」を真剣に考えていながら、答えを見つけないことができずに、考えることから目をそむける事を選択しているのだと私は思います。考えれば考えるほど未来は暗く、不安に押しつぶされそうになっているからこそ、逃避できる場所に入り込んでしまうのです。

この作品は「社会と距離感を持たずに苦しむ」ということが大きなテーマです。生きていることに現実感がない。誰かと話をしたい、けれども話すことがなにもない。「愛」にしても、相手を思いやるのではなく、自分をリアルに感じることだけをひたすら求めつづける。そんな登場人物たちは現代の若者たちに通ずるところが多いと思います。

「ふたりだけの二人」は絶望的な未来を目の前にし、どのように生きていくかを迷っている人間の叫び声です。答えは示していません。なぜなら簡単に答えの出していいことではないし、また私自身がわからずに迷っているからです。どうしていいかわからないからこそ「どうしていいかわからない」と叫んだのです。

この物語は他に身寄りのない兄妹が主人公です。進学も就職もせず、万引きや盗みを繰り返しながら、世界と全く接点を取らずに生きています。ふたりだけの世界を作り、そこから出ることを怖がっています。ふたりで作る世界は優しく甘美であり、そこから出ることを恐れています。(それはフリーターになることを選択する人たちが社会に出ることを恐れる気持ちと同じではないでしょうか)

しかしそんな生活は長くは続かないと兄は思い、外に出ようとしています。その日暮らしは辞めて、仕事につきます。しかし彼らを待ち受けていたものは絶望

でした。社会とコミュニケーションをとることができず、陰湿ないじめにあつたりして、何をやってもうまくいきませんでした。

現実に引き裂かれたふたりが選択したのは、元にもどるということでした。ふたりだけの世界をもう一度築き、もうそこからは決して出るまいと……。

社会に対してより攻撃的になったふたりに待ち受けている将来は、明るいものではないでしょう。しかし今目の前にある甘美な世界に恍惚となるのです。

この作品は万人受けする作品ではありません。しかし「幸せ」になるための答えを見つけることができず、刹那的に生きることを選択する、多くの迷える若い人々に訴えることができると私は信じています。

登場人物

ヒロシ（18） 子供の頃父親が蒸発し、その後母親が病死してからは進学も就職もせず妹のミュキと万引きや盗みを繰り返しながら生きてきた。ミュキ以外の人間と全く接点を持たず、ふたりだけの世界に浸っている事を幸福に思っているが、そんな生活をこれからも続けることに不安を持ち、外で働くことにするが、社会とコミュニケーションを取ることができない。

ミュキ（16） ヒロシの妹。ヒロシとふたりだけの生活を満足に思い、将来のことをあまり考えず、今が楽しければいいと思っている。しかし平凡な家庭に憧れている。

亨（48） ヒロシとミュキの父親。若い頃足を怪我してから思うように働けなくなってから家庭内暴力を繰り返すようになり、その挙句に蒸発する。しばらく音信普通だったが、七年ぶりにヒロシとミュキの前に現れる。

アヤノ（29） ヒロシの勤める宅配便集配所の事務員。ヒステリックな性格。彼女はただ「幸せ」になりたいと思っただけだが、「今すぐなろう」とするために、そこを男たちにつけこまれる。男性経験豊富で職場では「誰とでもやらせる女」と言われている。しかし彼女はひとつひとつの恋に真剣であり、愛した男の言うことなら何でも聞き、そのためなら全てを犠牲にする。

黒岩（28） 集配所の現場班長ヒロシの上司。無愛想なヒロシが気に入らず、陰湿ないじめをする。女好きで、アヤノからマユミと次々に女を手を出す。

マユミ（21） 集配所の事務員でアヤノの同僚。

俊子（故人） ヒロシとミュキの母親。亨が蒸発してしばらくして病死。

○デパートのトイレ

ヒロシ（18）、洋式便器に座りカッターの刃を小さく砕いたものを、バンドエイドで右手の人差し指と中指に巻きつける。右手で壁をなざると二本の傷が走る。トイレから出ていくヒロシ

○デパートの通路

足早に歩くヒロシ。
雑貨売り場のウインドウの前に、妹のミュキ（16）が立っている。ミュキ、ちらっとヒロシを見る。
ヒロシ、ミュキと目を合わせず、雑貨売り場の前にあるCD店の中に入っていく。

○CD店の中

グレーのバッグを肩にかけて奥のほうまで歩いていくヒロシ。
「洋楽ROCK」と書かれた棚に立ち、辺りを伺いながらバッグのファスナーを少しだけあける。
防犯カメラの位置をチェックして体の向きをかえるヒロシ。
棚からCDを一枚取り出し、右手で表面をなざると防犯タグが外れる。すばやく商品をバッグの中に入れて周りを見るヒロシ。
商品の整理をしている店員。レジでバーコードを打つ店員。
誰もヒロシに注意を払っていないようだ。
緊張感から解放されたヒロシ、左手でCDをつかめるだけつかみ、鮮やかな手つきでタグを切り取ると、バッグの中に入れる。
ヒロシ、「邦楽。ポップス」と書かれた棚に移り、同じように次々とバッグの中にCDを入れていく。
ハーフコートを着た女性がCDを見ている。
ヒロシ、彼女の横に立ちCDを探すふりをしながら、彼女の持っていた大きな紙袋の中に、切り取った防犯タグを入れる。

○同、レジ

バーコードを打っている店員Aと店員B。
店員Aがレジしたに備え付けられた店内を映したモニターを見る。万引きしていることははっきりとは写ってはいないが、ヒロシの行動を不審に思い、横にいた店員Bをひじでつつく。
店員B、モニターを見た後レジ近くで商品整理をしていた店員

Cに声をかける。

店員B「四丁目十一番、黒（4番柵付近にいる、十代の男性が、黒い服を着ている。彼が怪しい）」

店員から店員へ「万引きを注意しろ」という暗号は伝えられていく。

○同

ヒロシに向かって歩いてくる店員C。

ヒロシ、店員Cとは目を合わせず、レジに並ぶ。

入り口には店員Dが立っている。

突然「ピピピピ」と大きな音が店内に響き渡る。ハーフコート
の女性が店から出たときに、ヒロシが彼女の紙袋に忍ばせた
防犯タグが反応したのだ。

店員Dがハーフコートの女性を呼び止める。

店員D「すみません」

それを見たヒロシ、猛然と走り出す。

店員C「ちよつと待った」

ヒロシ、店を出たところでミュキと激しくぶつかる。

ミュキは転倒し、床に二つのバッグが落ちる。どちらも同じ色
をしている。

ヒロシ「気をつける。バカヤロー」

ヒロシ、バッグを拾って走り出す。

店員Cと店員Eがヒロシを追いかける。

店員Eは携帯電話を取り出す。

店員E「もしもし、流星ミュージックです。万引きの客が六階二十五番地に向
かって逃げています。十の黒い服を着た男。至急応援お願いします」

ミュキ、逃げるヒロシを見つめる。

店員B「大丈夫ですか」

話しかけられたミュキは驚いて店員Bを見る。

ミュキ「さわらないですよ。スケベ」

ミュキ、店員Bの手を払いのけると、逃げるように去っていく。

○同、通路

走るヒロシ。客を突き飛ばしながら逃げていく。

前方から警備員Aがやってくる。

ヒロシ、非常階段に逃げる。

○ 非常階段

階段を駆け足で下りていくヒロシ。
下の階から警備員Bが上ってくる。

立ち止まるヒロシ。

店員Cがヒロシの襟をつかむ。

ヒロシ、店員Cの腕にかみつく。悲鳴をあげる店員C。

警備員B「てめえ」

警備員B、ヒロシの腹に蹴りを入れる。

一瞬息ができなくてその場にうずくまるヒロシ。

店員Cがヒロシの胸倉をつかむ。

店員C「お客さん。こういうことやってもらっちゃ困るんだよ」

ヒロシ、店員の胸倉をつかみ返す。

ヒロシ「なんだよ『そういうこと』って」

店員C「しらばつくれるんじゃねえぞ」

店員C、ヒロシからバッグを奪おうとするが、ヒロシは離そうとしない。

ヒロシ「こん中何もなかったらどうしてくれるんだよ」

店員C「お宅のこと全部見てんだよ」

ヒロシ「だからどうしてくれるって聞いてんだよ。この野郎」

店員C「うるせえ」

店員C、ヒロシからバッグをひったくり中を開ける。

雑誌やスポーツ新聞等がでてくるがCDは一枚も出てこない。

啞然とする店員や警備員たち。

ヒロシ、手店員Cの名札をつかむ。「吉村博之」と書いてある。

ヒロシ「おい吉村！吉村博之！この社長呼んでこいよ」

ヒロシを取り巻くものたちは何も言えない。

ヒロシ「よおって！」

○ 中古CD店

カウンターには新品同様のCDが山積みになれ、白髪の店主(55)が一枚ずつ入念にチェックしている。時々いぶかしげにミユキを見る。

ミユキ、手持ち無沙汰に店内を見回している。肩からはグレーのバッグをかけている。

店主「ねえ、ちよっと」

渋々カウンターにやってくるミュキ。不愉快そうに店主を睨む。

店主「随分保存いいねえ。ちよっと良すぎるんじゃない」

ミュキ「だから」

店主「なんで売っちゃうの？」

ミュキ「おじさんに関係ないじゃん。買うの？買わないの？」

店主、ミュキを睨みつけながらミュキの前に一万円札を四枚出す。

ミュキ、それをひったくるようにつかむと足早に出て行く。

○道

夕暮れの都会を歩くミュキ。家族連れとすれ違い一瞬立ち止まる。幸福そうな父と母と娘。再び歩き出すミュキ。

○ターミナル駅

駅前のロータリーでミュキがヒロシを探している。待ち合わせの人々でごった返す中、妹は兄を見つけることができないでいる。

ヒロシが公衆便所から出てくる。キョロキョロしているミュキを見つける。

自分を探しているのがおかしくてくすりと笑う。

ヒロシ、ゆっくりとミュキに近づいていく。

ヒロシに気づくミュキ。

ミュキ「ヒロシ」

嬉しそうに走り寄ってきてヒロシに抱きつく。

ミュキ「あせるじゃん。つかまったかと思ったよ」

ヒロシ、三万円をミュキに見せる。

ヒロシ「ほら」

ミュキ「何これ？」

ヒロシ「これで穩便にだつてさ。馬鹿だよねあいつら。それでどうだった？」

ミュキ、右手を四本広げる。

ヒロシ「すげえ。結構出したじゃん」

ミュキ「でも、あそこのおやし超むかつくよ。ずっとミュキのことじろじろ見

てさあ、ひき殺してやりたいよ」

ヒロシ「この辺じゃもう買ってくれるところないんだよな・・・」

○同、ロータリー

地べたに座り込んで道行く人々を眺めているヒロシ。ミユキはヒロシの肩にもたれて歌をうたっている。

ヒロシ 「ねえミユキ」

ミユキ 「なに？」

ヒロシ 「そろそろちゃんと働かないとやばいかもしんない」

ミユキ 『「ちゃんと」って？』

ヒロシ 「お母さんのお金もうすぐなくなるんだ。遊んでばかりもいられないよ」

ミユキ 「じゃあねえ、ミユキお墓屋さんがいい」

ヒロシ 「墓？」

ミユキ 「ミユキとヒロシで道に立って、『今日はお墓が安いですよ』って言うの。

それで売れ残ったやつお店の人から貰ってさ、お母さんのお墓建てようよ」

笑う二人。

ミユキ 「お母さんに会いたいな・・・」

ヒロシ 「生きてたら俺たち見て何て言うかな」

立ち上がるヒロシ。タクシー乗り場の方に向かって歩いていく。

誰かが落とした百円玉が転がってきてミユキの前で止まる。ミ

ユキはそれを拾わずに、ただ見つめている。

それは自分とは違う世界の物体。

スーツとネクタイ姿の男がやってきて百円玉を拾って去っていく。

タクシーをつかまえたヒロシがミユキを呼ぶ。

ヒロシ 「ミユキ」

ミユキ、立ち上がってヒロシの方にかけていく。

○タクシーの中

タクシーに乗り込むと運転手に行き先を告げる。

ヒロシ 「平塚」

運転手 「平塚？まだ電車あんでしょ」

ヒロシ 「平塚」

運転手 「ちよっと遠すぎるよ」

ヒロシ 「平塚」

運転手、メーターを落とす。

ヒロシ 「高速使うなよ。余計な金払わないからな」

運転手 「ったく・・・」

○ タクシーの中

ミユキ、ヒロシの肩にもたれている。

ミユキ「絶対、お墓屋さんだからね」

ヒロシ「いいよ。墓のセールスね」

ミユキ「ふふふ」

窓の外を眺めていたヒロシ、ミユキの手を二回たたく。

ヒロシを見るミユキ。

運転手は疲れた顔をしている。

いきなり大声をあげるミユキ。

ミユキ「お財布がない」

ヒロシ「嘘。よく探したのか？」

ミユキ「だってバッグの中にもないんだもん。さっき落としたんだよ。絶対そう」

運転手「ちよっとお客さん・・・」

ヒロシ「なにやっつてんだよ。あん中に全財産入っただぜ。来月までどうやって暮らすんだよ」

運転手「家に帰ったらお金あるんでしょ」

ミユキ「(べそをかきながら)全然ないの。どうしよう。ねえ、どうしたらいい？」

運転手「じゃあそこらへんの無人機で・・・」

ミユキ「もう私たちにお金貸してくれるところなんてないよ。来月バイト代入ったらちゃんと返すからさ」

運転手「冗談じゃねえよ！」

運転手、ブレーキをかけて車を停車させる。

運転手「こつちや遊びで車転がしてんじゃねえんだよ。降りろ。バカヤロー」

ドアがあげられる。

タクシーから降りるふたり。

車が去っていくのを見届けると笑い出す。

ふたりは走り出すと、目の前の細い路地を入っていき、突き当たりにあるアパートの階段を上っていく。二階のドアをあけると中に入っていく。

そこがふたりの住んでいる部屋。

○ ふたりの部屋

ドアをあけて中に入ってくるふたり。

六畳程度のフローリング。隅のほうに白い布がかぶせられたダ

ンボールが置いてあり、その上に女性の写真と骨壺が置いてある。ふたりの母親、俊子の遺影と遺骨である。

無造作に置かれた金魚鉢とテレビと洋服だんす。他には家具もなく、極端に物の少ない殺風景な部屋。

ミュキ、写真に手を合わせる。

ミュキ「お母さんごめんなさい。でももうすぐお墓建てるからね」

ヒロシ、床に座りリモコンでテレビのスイッチを入れる。

ミュキ、ヒロシの横に座りもたれかかる。

ミュキ「ねえヒロシ」

ヒロシ「ん？」

ミュキ「お母さんの話しよ」

ヒロシ「もう何度もしたじゃん」

ミュキ「またしようよ。お母さんっていい匂いがしたよね」

ヒロシ「忘れたよ。そんなこと」

ミュキ「ミュキのことミーちゃんって呼んでくれた」

ヒロシ「・・・」

ミュキ「ヒロシはヒロくんだったよね」

ヒロシ「そうだね」

ミュキ「ヒロくん！（ミュキ笑う）・・・会いたいね。今何やってるんだろ」

ヒロシくすりと笑う。

ヒロシ「そこにいるじゃないか」

ヒロシ、ダンボールに置かれた骨壺を指差す。

ミュキ、ヒロシの体に更に顔をうずめる。

○ 同

テレビをぼんやりと見ているヒロシ。

ヒロシの膝の上で眠っているミュキ。

○ ふたりのアパート

全景。翌日の昼過ぎ

○ ふたりの部屋

ミュキが眠っている横で、ヒロシが床に寝転んで履歴書を書いている。

目が覚めて掛け布団の中で背伸びをするミュキ。

ミュキ「いま何時？」

ヒロシ「三時」

ミュキ「どっちの？」

ヒロシ「明るいほうの三時です」

ミュキ、布団から出てきてヒロシを覗き込む。

ミュキ「なに書いてんの？」

ヒロシ「履歴書」

ミュキ「本当に働くの？嘘でしょ」

ミュキ、ヒロシの書いていた履歴書を手に取り、おどけた口調で読み上げる。

ミュキ『志望動機・貴社の将来性』何これ？」

ヒロシ「記入例写しただけだよ」

ミュキ、まじめに働こうとするヒロシに違和感があり笑う。

ミュキ「なんかあっち側の人間になったみたいだね。かっこいい」

ミュキ、そばに置いてあったアルバイト情報誌を手にとって見る。ところどころ赤い丸がついている。

ミュキ「電話した？」

ヒロシ「ううん。してない」

ミュキ「しようよ」

ミュキ、電話を引き寄せる。

ヒロシ「今すぐ？でもさあ・・・」

ミュキ「この神田葬祭っていうやつでいいんでしょ」

ミュキ、電話機をヒロシに差し出す。

電話機・・・それは他人とコミュニケーションをとるための道具。それはヒロシに恐怖を引き起こすもの。

ミュキ「ほら」

ヒロシ、しぶしぶ受話器を取って電話番号をプッシュする。呼び出し音が一回二回・・・。

受話器の声「神田葬祭です」

ヒロシ、緊張して話すことができない。

ヒロシ「あ、あのお・・・」

何も言わず、いきなり受話器を置いてしまうヒロシ。

ミュキ「どうしたの？」

ヒロシ「出ないよ。誰もいないんだ。また後でかけよ」

○ 同

アパートの前でごみを漁っている野良猫。

窓から顔を出して猫を見ているミュキ。

ぼんやりとテレビを見ていたヒロシが文句を言う。

ヒロシ「ミュキ、寒いよ。閉めて」

ミュキはヒロシにお構いなしで猫に呼びかけている。

ミュキ「バン、バン」

ヒロシ「なんで名前知ってるんだよ？」

ミュキ「バンっていう感じしない？会社の人帰ってきたかな」

ヒロシ「もういいじゃん。明日にしよ」

ミュキ「・・・じゃあどっか行こうか」

ヒロシ「いいよ。どこ行く？」

ミュキ「うーん・・・どっか」

○ 地下鉄の中

扉の近くに建つヒロシとミュキ。窓から外は暗闇が広がっている。

ヒロシ「行くよ。三・・・二・・・一・・・〇」

ヒロシが〇と数えるとはほぼ同時に地下鉄が地上に出て、窓の外が明るくなる。

ヒロシとミュキ、笑顔で見つめ合う。

○ 同

あみ棚の上にコートが置いてある。

ヒロシが持ち主を見ると座席で居眠りをしている。

ミュキは男の前に立っている。

地下鉄が駅に到着する。

降りる人がいなくなると次々と人が乗ってくる。

発車のアナウンス。

ヒロシ、あみ棚のコートをひつつかんで電車から降りる。

眠っていた男、自分のコートが盗まれたことに気づき、ヒロシを追いかけようとするが、ミュキが出した足につまづいて転んでしまう。

ミュキが降りるとドアが閉まる。

走り去っていくふたり。

ミュキの声「(ささやくような声で)きつきさ・・・ミュキの後ろにいたお父さんと男の子の話聞いてた？」

ヒロシの声「ううん聞いてなかった」

○ 地下街

地下街を楽しげに走るふたり。
扉をあけて駐車場へ続く階段を降りて行く。
ミユキの声「子供が、お父さんにクリスマスプレゼントの話してるの」

○ 地下の駐車上

ヒロシとミユキ、地下鉄で奪ったコートの中身を調べる。ミユキ、財布を取り出し現金とキャッシュカードを抜き取り、後のものは捨てる。
ふたりは用意しておいた洋服に着替え、かつら、つけひげ、シークレットブーツ、サングラスをつけて変装する。(後で訪れる銀行の防犯カメラに映るためだ)
ヒロシがポケットの中に入っていたライカのカメラを見つける。
ヒロシ、ミユキにカメラを向ける。
ポーズを取るミユキ。
ヒロシがシャッターを押すと、フラッシュが光る。

○ ミユキの写真。ストップモーション

ヒロシの声「もしかしてうさちゃんのセーターと、毛糸の帽子かぶった子？」
ミユキの声「そうそうそう」

○ 街

人ごみの中を歩くふたり。
カメラを自分たちにむけて写真を取りつづける。
ミユキの声「男の子はね、チョコレートと『長い長いペンギンの話』っていうのをもらったんだって」
ヒロシの声「なんだろう？絵本かな」
ミユキの声「たぶんね」

○ 銀行

キャッシュディスプレイの前のふたり。
盗んだ財布の中からキャッシュカードと免許証を取り出す。
免許証の生年月日には昭和30年11月25日と書いてある。
ヒロシ、暗証番号を3011と押して「確認」キーを押す。
「暗証番号が違います」と表示。

ヒロシ、暗証番号を1125と押して「確認」キーを押す。

「暗証番号が違います」と表示。

ミユキ、暗証番号を3125と押してヒロシを見る。

頷くヒロシ。

「確認キー」。

「金額を押してください」と表示。顔を見合わせてにっこりするふたり。

○ 同。防犯カメラの映像

変装したヒロシとミユキ、デイスペンサーから現金を受け取る。

カメラに中指を立てて出て行く。

ミユキの声「それで男の子が『僕ずっと起きてようって思ったんだけどな。寝

ちゃったよ。パパ、サンタクロース見た?』だって」

ヒロシの声「(はははと笑って) かわいい」

ミユキの声「でしょ」

○ バス停

体を寄せ合うようにしながらベンチに座っているふたり。

ミユキはヒロシにもたれて眠っている。

バスが停まりドアが開く。

ベンチから立ち上がらないふたり。

乗らないのかという目つきで運転手がヒロシを見る。

ミユキを抱く腕に力を入れ、運転手から目をそらすヒロシ。

回想始まり。

○ 回想。ヒロシ十一歳、ミユキ九歳。ファミリーレストラン

テーブルの上には食べ残したカレーライスとオレンジジュース。疲れて眠っているミユキの横で、ヒロシはぼんやり座っている。

横を通り過ぎる店員が、子供ふたりだけで店内にいるヒロシと

ミユキをいぶかしげに見ると、ヒロシは目をそらせて外を見る。

ヒロシ、窓の外に母親、俊子の姿を見つけると、ミユキを起こ

して窓越しに手を振る。

店内に俊子が入ってくる。厚化粧で派手な服を着ている。

ミユキ、目を覚まし母親のもとに走っていき、俊子に抱きついていく。

○道

夜道を歩いている俊子と兄妹。

俊子「友達はできた？」

首をふるヒロシ。

俊子「なんで？」

ヒロシ「あいつらやだよ。すぐに人のことバカって言うんだよ」

俊子「バカって言う人がバカなんだよ」

ヒロシ「ぼくバカじゃないよね」

俊子「ヒロシはいい子。とってもいい子」

ミュキ「ミュキは？」

俊子「ミュキもいい子。ふたりともとってもいい子」

角を曲がろうとする俊子。

ヒロシ「お母さん。こっちのほうか近道だよ」

俊子「こっちから行こう。アイス買ってあげるから」

ヒロシ「お母さん競争しよう」

俊子「いいよ。よういドン」

ヒロシとミュキが走り出す。俊子はそれに続いて走り出す。

俊子「ふたりとも早いなあ。お母さん勝てないよ」

走っていく母子三人。

遠くに団地の明かりが見える。

○子供時代に住んでいた部屋

父親の亨が俊子を殴っている。

部屋の隅で怯えながら見ているヒロシとミュキ。

亨が俊子の首に割れたビンを押し付けている。

亨 「謝れよ！俺に謝れ！」

俊子 「すみません」

亨 「本当に悪いと思ってるんだったら土下座しろ」

俊子、土下座する。

亨がヒロシの方を見る。

亨 「なに見てんだ。お前ら」

亨が割れたビンを持ってヒロシとミュキの前に立つ。

ミュキがヒロシの肩をつかむ。

這ってきた俊子が亨の足をつかむ。

俊子「お願いだからヒロシとミュキには手を出さないで」

亨 「・・・この野郎」

亨、再び俊子を殴り出す。

ヒロシ、それを見ないようにミユキの顔を抱きしめる。

○バス停

ヒロシを睨む運転手。

扉が閉まり、クラクションを一回鳴らしてバスが発進する。

ミユキ「うーん」

目を覚ますミユキ。

ヒロシ「起きた？」

ミユキ「ヒロシ、寒い」

ヒロシ「行こうか。おなかすいたね」

○コンビニエンスストア

誰もいない店内にヒロシとミユキが入ってくる。

レジにはふたりの店員がいる。古株の臼井（27）はビールケースに座って雑誌を読んでいる。その横で矢内（20）が疲れた表情をして立っている。

矢内が力のない声で言う。

矢内「いらっしやいませ」

臼井が矢内になにか耳打ちすると、臼井はふたりをちらっと見るとバックルームに下がっていく。臼井はヒロシとミユキが万引きの常習犯ということを知っていて、自分がバックルームの監視カメラでふたりを見張ることを告げたのだ。

ふたりはパンを手にとると、いきなり袋を破りあけて食べ始めてしまう。

ジュースやおにぎりなどを取り、その場で食べ始めながら店内をまわる。

ヒロシ、レジに來ると矢内の前にごみを置く。

矢内はなにも言わず、ごみについたバーコードを押ししていく。

レジに金額が表示される。

矢内「987円です」

ミユキ、「文句ないでしょ」という顔をして千円札を台の上に置く。

矢内は台に置かれたごみを袋につめて、釣りを渡す。

ミユキが釣りを受け取ると、ごみの入った袋は置いたままふたりは店から出て行く。

○河原

草の上に寝転がるふたり。

ミュキ「本当に働くの？」

ヒロシ「こんな生活いつまでも続けられないよ」

ミュキ「ヒロシは楽しくないの？ミュキと一緒にいて」

ヒロシ「楽しいよ。でも・・・」

ミュキ「だったらずっとこうしていようよ。ヒロシがいないとミュキつまんないよ」

空には綺麗な星が広がっている。

ヒロシ「むかつくな」

ミュキ「なにが？」

ヒロシ「空の野郎がさ。いつかぶっ壊してやる」

○宅配便の集配所

全景

○同・事務所

無言でパソコンのキーボードを叩いているアヤノ（29）。その横ではマユミ（21）がお菓子を食べながら女性週刊誌を読んでいる。

彼女たちのデスク横の通路に出された椅子に、履歴書を抱えたヒロシが座っている。

彼女たちの仕事する姿をぼんやりと眺めているヒロシ。いきなりアヤノが机を叩いて立ち上がる。

アヤノ「なによ！」

ヒロシ「え？」

アヤノ「人のことじろじろ見ないでくれる！気持ち悪いの」

ヒロシ「別に見てないよ」

アヤノ「見てたじゃない。私のこといやらしい目つきで見てたじゃない」

マユミ、週刊誌を読んだまま珍しくもないという口調で

マユミ「アヤノ先輩。たまに男から見られたぐらいで、大騒ぎしないでくれませんか？」

アヤノ、立ち上がると事務所から出て行く。

アヤノとすれ違いに所長が入ってくる。

所長「ごめん待たせちゃって。『FROM A』見た人でしょ」

○同、ライン

ラインの上を流れていく客からの荷物。その脇に立って従業員たちが地域ごとに仕分けをしている。

仕分けされた荷物を乗せたキヤスターを押すヒロシ。

現場班長の黒岩(28)がヒロシに声をかける。

黒岩「それ片付けたらあがっていいから」

ヒロシ「・・・」

黒岩「わかんないことあったら何でも聞いてよ」

ヒロシ「・・・」

ヒロシ、去っていく。

黒岩「(独り言)なんだあいつ」

○アパート近くの道

疲れた足をひきずるヒロシ。

ヒロシが路地に入ると、自分たちのアパートが見える。

部屋には明かりがついている。

立ち止まるヒロシ。

優しい光を放つ窓ガラス。

あの中でミュキが自分を待っている。

全力疾走で走り出すヒロシ。あの中でミュキが自分待っている。

○ふたりのアパート。翌朝

寝ているヒロシの耳元でミュキがささやく。

ミュキ「朝ですよ。起きないと夜になっちゃいますよ」

しぶしぶ起きあがるヒロシ。

ミュキ「はい、ごはん食べよ」

ミュキ、コンビニの袋からパンとコーヒーを差し出す。

ヒロシ、サンドイッチを口に含みながら時計を見る。

ヒロシ「やっべえ。なんで起こしてくれなかったんだよ」

あわてて起きて着替えるヒロシ。

ミュキ「いまさら急いだって同んなじだよ。風邪ひいたことにしてさ、どっか

遊びにいこうよ」

ヒロシ「そんなことできるわけないだろ。クビになっちゃうよ」

ミュキ「いいじゃん。クビになったって」

ヒロシ「(ため息をつきながら) 夕方には帰ってくるから」

ヒロシ、部屋から出て行く。

○同

昼下がり。
ミュキ、金魚蜂を眺めながらひとりで退屈な時間を過ごしている。

ドアのノブを動かす音。
ヒロシが帰ってきたと思ったミュキは、嬉しそうに玄関にかけより、ドアを開ける。

驚くミュキ。

ふたりの父親、亨（48）が立っている。

ミュキ「お父さん」

亨「ミュキ。しばらく見ないうちに随分大きくなったじゃないか。元気だったか」

ミュキ、亨の酒くさい息に顔をそむける。

亨が部屋にあがろうとすると、ミュキが亨の体をおさえ制止しようとする。

亨「なんだよ」

ミュキ「嫌」

亨、それを押し返しミュキ転ぶ。

亨、ミュキを見ようともせず、びっこをひきながら部屋の中に入りこむ。

亨、俊子の写真を見つけ手に取って見る。

亨「父さんなあ、お前たちのこと随分探したんだぞ」

ミュキ、怯えている。

亨「また三人で一緒に暮らそうと思ってな」

ミュキ「・・・」

亨「ヒロシは何時に戻る？」

部屋を見渡す亨。

ミュキ「・・・」

亨「（怒鳴って）何時に戻るって聞いてるんだよ！」

ミュキ「・・・六時ごろ」

亨、時計を見た後、洋服たんすの中をあけ、中をかき回す。

亨「俊子の保険金がまだ残ってるだろう。預金通帳どこにあるんだ。え？」

ミュキ「知らない」

亨「知らないわけねえだろ！な、いい子だから」

激しく首を振るミュキ。
亨、押し入れや戸棚を次々とあけて中をかき回していく。
泣きそうな顔で父親を見ているミュキ。

○電車の中

満員電車に揺られているヒロシ。
つり革につかまっているが、一瞬手を放した隙にサラリーマン
風の中年に奪われてしまう。
ヒロシ、男を睨むが男は知らんぷり。
電車がブレーキをかける。
ヒロシ、バランスを崩して若い女性に倒れかかる。
女性は鬱陶しそうにヒロシを手で押しやる。

○駅

帰り道を急ぐヒロシ。

○ふたりの部屋

ドアを開けるヒロシ。荒らされた部屋を見て驚く。
ヒロシ「ミュキ・・・」
ミュキは部屋の隅でうずくまっている。ヒロシに気がついて顔
をあげる。

ミュキ「ヒロシ」
ヒロシ「どうしたんだよ」
ミュキ「預金通帳と印鑑ってどこにあるの？」
ヒロシ「なんでそんなこと聞くんだ？」
ミュキ「別に」
ヒロシ「なにがあつたんだ？」
ミュキ「いいよ。もう」

ヒロシ、ミュキの肩を両手でつかむ。
ヒロシ「おい！」
ミュキ「・・・お父さんが来た」
ヒロシ「・・・何しに」
ミュキ「だから・・・」
ヒロシ「今あいつどこにいるんだ」
ミュキ「違うよ、ヒロシ。今度は大丈夫だって。お父さんちゃんと働くからっ
っ」

ヒロシ「それで次はいつ来るって？」
ミュキ「ねえ、もうやめようよ。三人で仲良く暮らそうって。お父さんもう殴
つたりしないよ」

○道。翌日の昼間

びっこをひいて歩いてくる亨。

○ふたりのアパート

ドアをノックする亨。

亨 「優しい声で」ミュキ。ミュキ」

ドアが開くと中からヒロシが出てくる。

うるたえる亨。

ヒロシ「何しに来たんだ」

亨 「ヒロシ、元気そうだな。・・・まあ帰るよ」

ヒロシ、亨の肩をつかむ。

ヒロシ「久しぶりじゃねえか。クソオヤジ」

亨 「(ヒロシから逃げるように) ちょっと様子見に来ただけなんだ。元気だ

つたらいんだよ」

ヒロシ、手を離さない。

○ガード下の空き地

亨を殴るヒロシの手をミュキが止めに入る。

ミュキ「やめて！ねえヒロシ、お願いだから！」

ヒロシ「お前はどいてろよ」

ヒロシ、ミュキを突き飛ばす。

亨はヒロシに殴られ、血だらけになってうずくまっている。

ヒロシ「テメエにやる金なんてねえんだよ。この酔っ払いがよう！」

ヒロシ、更に何回も亨を殴る。

亨 「悪かった」

ヒロシ『悪かった？』

亨 「俺が悪かった。許してくれ」

ヒロシ『許してくれ？』

亨、激しく首を縦に振る。

ヒロシ「お前は許したのかよ？」

亨、怯えた表情でヒロシを見る。

ヒロシ「泣きながら』許してください』って言うお母さんに、お前どうしたっ

け？」

亨、激しく首を横に振る。

ヒロシ「確かこうしたよな」

ヒロシ、更に激しく、激しく殴る。

ヒロシ「俺やミュキにもこうしたよな」

ヒロシ、亨の髪の毛をつかみ地面に打ち付ける。

ヒロシ「お母さんがどんなふうになっちゃったのか、知ってんのか！え！」

ヒロシ、涙声になっている。

ヒロシ「みんなテメエが悪いんじゃないか。テメエが死ねばよかったんだ」

亨「・・・すみません」

卑屈に土下座する亨。

ヒロシにはそんな亨の弱さが許せない。

ヒロシ「・・・ぶっ殺してやる」

ヒロシ、落ちている棒を拾い、亨の頭上に構える。

ミュキが大声で泣き叫ぶ。

ミュキ「やめようよ！もうそういうのやめようよ！」

ヒロシ、棒をその場に落とすと、その場に泣き崩れる。

ヒロシ「うおおおおお」

その場から逃げていく亨。

○新宿

情景

○ブティックの前

ショウウィンドウに飾られた男性ものの赤いセーターを眺めているミュキ。

ブティックは雑居ビルの一階にあり、となりには地下に伸びる階段と「格安ビデオ販売」と書かれた看板がある。

隣のビデオ店を気にしているミュキ。

○ビデオ店の中

「流出物」「素人女子高生」などの張り紙が張られている店内。扱っているビデオのほとんどがアダルトビデオのようだ。

女性の生写真の貼ってある、裏ビデオとおぼしきパッケージが並んでいる。

ヒロシ、入り口を見る。防犯ベルはなさそうだ。店内に客はほ

とんどいない。
続いてレジを見ると茶髪のアルバイトが雑誌を読んでいる。
ヒロシ、すばやくビデオをバッグの中に入れる。

○ブティックの前

ヒロシを待つミュキ。
赤いセーターを見つめている。
ミュキ、ビデオ店を覗くがヒロシが出てくる気配はない。
ミュキ、ブティックの中に入っていく。

○ビデオ店の中

店から出て行こうとするヒロシ。
防犯ブザーがなる。天井に設置されていたのだ。
あわてて走り出すヒロシ。

茶髪「ちょっと待てよ」

逃げるヒロシの後を茶髪が追いかけていく。

○同、外

ヒロシ、階段を駆け上がり、外に出る。
辺りを見回すがミュキはいない。
後ろから茶髪がヒロシをつかむ。
ヒロシ、茶髪にかばんを投げつける。
道に散乱する裏ビデオ。
茶髪がよろける隙に逃げるヒロシ。
追いかける茶髪。

○路地

細い路地を走るヒロシ。行き止まりにぶつかってしまふ。
逃げ場のないヒロシを追い詰めていくヒロシ。

ヒロシ、ポケットからカッターナイフを取り出して構える。

茶髪「そんなんで人刺せると思ってんのかよ。殺す覚悟もねえくせに。この
タコ」

茶髪、ヒロシに近づいていく。

ヒロシ、茶髪に飛びかかる。

茶髪「うっ！」

腕を抑える茶髪。

白いシャツが真っ赤に染まる。
茶髪、ヒロシに刺された場所を押さえながらうずくまる。
ヒロシ、振るえながら後ずさりしたあと、茶髪の脇を走りぬけていく。

○公園

ヒロシ、ベンチに座りながら恐怖と罪悪感で震えている。
そばでミュキがヒロシを見つめている。
ふたりとも何も言わない。

○宅配便の集配所

汗だくになって働いているヒロシ。
次々と荷物を仕分けしている同僚たちの横で、荷物に書かれた宛名と、地区ごとに分けられたケージを交互に見ながらウロウロしている。
足元にはまだ仕分けしていない荷物が山積みになっている。
休憩時間のベルがなり、従業員たちがラインから離れていく。
ひとりだけ取り残されるヒロシ。黙々と作業を続けている。
遠くからヒロシを見ていた黒岩、仕事ののろさに舌打ちをする。

○ふたりの部屋

ぐるぐると回る洗濯機。
流れを見つめているミュキ。

○同

掃除機をかけるミュキ。

○同

部屋に広がる洗濯物の山。干す気にもなれず座り込む。
時計をつかんでみるとまだ午前中だ。
ため息をつくミュキ。退屈で仕方ない。
時計を力いっぱい投げると金魚鉢に当たった。
金魚鉢は碎けて、床の上を金魚がピチピチはねる。
ミュキ、いたわるように金魚をつかむ。

○同。トイレ

便器の中に金魚を放してやるミュキ。

水の中を泳ぐ金魚。

ミュキ、金魚を眺める。

ミュキ、金魚を水と一緒に流してしまふ。

○部屋

ミュキ、たんすをあけて、バッグの中に下着や洋服を入れる。
部屋から出て行くミュキ。

○アパート近くの道

去っていくミュキの後姿。

○ふたりの部屋。夜

ひとりぼっちの部屋の中。

ひざをかかえてうなだれているヒロシ。

○集配所、ライン

休憩のベルがなり、ラインが止められる。

従業員たちは次々と持ち場を離れていく。

ヒロシひとりだけが作業をやめない。足元にはまだ仕分けされていない荷物が山積みになっている。

横を通り過ぎる従業員たちは、誰も手伝おうとせず、馬鹿にした視線をヒロシに投げていく。

○同、廊下

思いつめたように足早で歩くヒロシ。

○同、トイレ

個室に入るヒロシ。

ポケットの中からマジックを取り出して壁に絵を書き始める。

壁は大きなキャンバス。静けさの中、それは彼だけの秘密。壁に描き殴るヒロシ。

輪郭ができてきた。女性の顔を描いているようだ。
ポチャン。

蛇口から水が落ちる音。びっくりするヒロシ。

○同

完成した絵。

風に髪をなびかせて、左手で麦わら帽子を押さえている少女の絵。ミユキに似ている。

洋式の便器に座って、満足げに自分の作品を眺めているヒロシ。誰かがヒロシの扉をノックした。息をひそめるヒロシ。

ノックの音は次第に大きくなっていく。

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド
音を立てないように便器の上に足を乗せるヒロシ。

ドアを開けようとする音。

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ
息をひそめるヒロシ。

音がやむ。

足音がトイレから出て行った。

ドアを少しあけて外を確かめると、誰もいない。

安心したヒロシ。大きく息をはく。

ヒロシの鼻から一筋の血が流れてくる。

○集配所

荷物を積んだカートを押しているヒロシ。

黒岩のカートがぶつかり、ヒロシの荷物が崩れて床に落ちる。

黒岩「どこ見て歩いてんだよ」

ヒロシ、落ちた荷物を拾う。

黒岩「まったく使えねえ奴だな。・・・お前さあ、何考えてんだよ」

ヒロシ、落ちた荷物を積み直して去ろうとする。

黒岩「ちよつと待てよ」

黒岩、ヒロシのカートの一番下にある荷物を指差す。

黒岩「わ・れ・も・の・つて書いてあんだろ。読めねえのか、おい」

ヒロシ「・・・はい」

去ろうとするヒロシを黒岩がつかむ。

黒岩「積みなおせよ。最初から」

ヒロシ、カートの荷物を一つずつ出していく。

「割れ物」と書かれた荷物を横によけ、再びカートに積んでいく。最後に「割れ物」を一番上に乗せようとする。

黒岩「それ開けてみる」

ヒロシ「え？」

黒岩「いいから」

ヒロシ、「割れ物」のダンボールを開けると、中の電気スタンドが割れている。

黒岩「あーあ」

黒岩、電気スタンドの破片を取り、ヒロシの目の前に出す。

黒岩「どうすんだ？お前」

ヒロシ「すみません」

黒岩「荷物のひとつひとつがおお客様にとっては大切なものなんだよ。どうすんだ？」

ヒロシ「・・・すみません」

黒岩「だからどうすんだって聞いてんだよ！この野郎！」

○集配所近くの河原

休憩時間にひとりでタバコを吸っているヒロシ。

アヤノが近寄ってくる。

アヤノ「トイレの絵、君が描いたんだって」

ヒロシ「なんで？」

アヤノ「みんなそう言ってるよ。繊細な人なんだね」

ヒロシ「繊細？俺が？・・・なにも知らないくせにわかったふうな口きかないでくれる？」

アヤノ「君は世界との距離感がかめてないのよ」

ヒロシ「なんだそりゃ？」

アヤノ「人の気持ちと考えられないってこと」

ヒロシ『人の気持ち』？それを言うなら『私の気持ち』じゃないの？相手にされないからってひがまないですよ」

去っていくヒロシ。

○集配所

作業が終わり、廊下を歩く従業員たち。ヒロシはどの群れにも加わらず、一人でぼつんと歩いている。

事務所の前を通りかかり中を覗くヒロシ。

アヤノが一人だけが残って黙々とキーボードを叩きつづけている。

アヤノを見つめるヒロシ。

○集配所、入り口

物陰で隠れているヒロシ。
やがてアヤノが出てくる。
アヤノの後を密かについて行くヒロシ。

○電車の中

車内で小説を読んでいるアヤノ。
隣の車両からアヤノを見つめるヒロシ。

○映画館

古い名画座で「欲望という名の電車」を上映している。
チケットを買うアヤノを遠くから見つめるヒロシ。

○同、館内

暗くなっている館内にヒロシが入ってくる。
ヒロシ、アヤノに気づかれないように一番後ろの席に座る。
スクリーンに映し出されるビビアン・リーの悲しみ。
客のほとんどいない客席。
映画を見るアヤノ。
そしてヒロシ。

○アヤノのマンション

アヤノの姿を遠くから見つめるヒロシ。
アヤノは部屋のドアを開け、中に入っていく。
部屋に明かりがともる。
ヒロシは生まれて初めて「他人」に興味を持ったのだった。
立ち去るヒロシ。

○コンビニエンスストア

レジに置かれた一個百円の菓子パン。
レジに立っている店員は、以前ミユキと夜中に立ち寄ったとき
にいた、矢内だ。
ヒロシ、宅配便の社名の入った封筒を取り出し、その中の千円
札で払う。
矢内、菓子パンにシールを貼るときに、親指に力をこめ、パン
を潰してヒロシに投げるように渡す。
ヒロシが「何をするんだ」という目で矢内を見ると、矢内はも

のすごい形相でヒロシを睨み返す。
ヒロシ、矢内から目をそらすと、逃げるように店内から出て行く。

○アパート。外

疲れた足取りで階段を上っていくヒロシ。
部屋をあけるヒロシ。鍵はかかっていない。ミユキが帰ってくるかもしれないと思っっているからだ。

○部屋の中

明かりをつけるヒロシ。
足の踏み場もないぐらい散らかっている部屋。
ため息。
バイト代の封筒から五千円札を取り出すと母親の遺影の横に置く。
床のものを足でどけてスペースを作ると、寝転んで菓子パンをぼくぼく食べる。

○弁当屋

店の外で待っているミユキ。
店員「のり弁当二つのお客様」
ミユキ、店内に入り弁当の入った袋を受け取る。

○道

サンダルを履いたミユキが小走りに歩く。
古い木造アパートに入っていくミユキ。

○亭の部屋

部屋の中に入るミユキ。

ミユキ「ただいま」
亭 「おかえり」

部屋の中では赤いセーターを着た亭が、こたつにあたってテレビを見ている。彼の着ているセーターはビデオ店隣のブティックでミユキが見つめていたものだ。

買ってきた弁当の袋をあけるミユキと亭。
ミユキ、亭に五千円札を渡す。

亨、右手で「心」を作って受け取る。

亨 「ヒロシ怒ってるだろうな」

ミュキ 「大丈夫だよ。わかってくれるって」

亨 「ああ。明日から仕事探す。これからはちゃんと働くよ。落ち着いたら

ヒロシも呼んで三人で暮らそう」

ミュキ 「そうしたら大きな家に住もうよ」

亨 「(笑いながら) 大きな家？」

ミュキ 「(両手を広げて) これぐらい大きい。ミュキとお父さんとヒロシで三人で寝られるぐらいの」

亨 「ああ。そうしよう」

弁当を食べるふたり。

ミュキ 「お父さん」

亨 「ん？」

ミュキ 「お・と・う・さ・ん」

亨 「なんだよ？」

恥ずかしそうに笑うミュキ。

ミュキ 「ずっと呼びたかった」

○道

ヒロシのアパート近くの道を歩くミュキ。

○ヒロシのアパート。昼間

鍵のかかかっていない部屋に入ってくるミュキ。

母親の遺影の横にはヒロシが置いた五千円札がある。

ミュキ、それをつかむと出て行く。

○都電の中

ミュキと亨が並んで座っている。

ふたりの前の座席でぬいぐるみを持った幼女が父親にじやれて
いる。優しく娘をあやす父親。

彼らを見つめるミュキ。

ミュキと亨目が合う。微笑む会うふたり。

ミュキ、亨の腕をつかみ体を寄せる。自分にも父親がいること
を確かめるように、強く。

○ハローワーク前

ハローワーク入り口の前に立つミュキと亨。

亨 「なんか緊張するな。お父さんこういうの慣れてないから」
ミュキ 「がんばって」

亨、建物の中に入っていく。

○集配所

仕分け作業をしているヒロシのもとに、黒岩がやってくる。

黒岩 「おい。これお前のかごに入ってたぞ」

黒岩、持っていた荷物をヒロシの足元に置く。

黒岩 「お前の担当何番だ」

ヒロシ 「53です」

黒岩 「よく見てろよ」

足元の荷物には「58」と書いてある。黒岩、「8」のところを指さして

黒岩 「これが3に見えるか」

ヒロシ 「・・・8です」

黒岩 「お前は数字も読めないのか」

ヒロシ 「すみません」

黒岩 「(皆に聞こえるような声で)なんでこんな使えない奴が来たのかなあ」

○更衣室

誰もいない部屋にヒロシが入ってくる。

日勤のものは皆帰ってしまったらしい。

着替えようとロッカーをあけると、誰かが仕掛けたバケツから水がこぼれ、ヒロシは水浸しになってしまう。

○事務室前の廊下

出て行こうとするヒロシ。

アヤノがびしょぬれになったヒロシを見て

アヤノ 「どうしたのよ？ いったい」

ヒロシ 「別に・・・」

アヤノ 「ちよっと待って」

アヤノ、事務室に戻り、バスタオルを持って戻ってくる。

ヒロシの体をふいてやるアヤノ。

アヤノがかがんだときに、襟から胸がのぞく。

アヤノ、ヒロシの背中をふきながら、抱きしめるように自分の

体をぴったりとくっつける。

あわててアヤノから離れるヒロシ。

アヤノ「着替え持っていないでしょ」

ヒロシ「いいよ。そんなの」

アヤノ「だめよ。風邪ひいちゃうわ。ねえ、来て」

アヤノ、ヒロシの手を握り引っ張っていく。

○階段

アヤノは階段を上って行く。

彼女に引かれていくヒロシ。母親のそれに似た女の手の感触。

アヤノが立ち止まり、ヒロシを見て微笑む。

ヒロシの顔に緊張が走る。

アヤノは「倉庫」と書かれた部屋の中にヒロシを連れて入っていく。

○倉庫

ふたりしかない部屋。

アヤノ、ヒロシの肩に両手をまわす。

アヤノの唇がヒロシの唇をふさぐ。

長いキス。動けないヒロシ。

アヤノ「すっかり濡れちゃって」

アヤノの手はヒロシの体をゆっくりと下りていく。そしてズボンのファスナーを下に降ろす。

アヤノ、セーターを脱ぐ。

廊下で誰かの足音が近づいてくるのが聞こえる。

あわてて離れようとするヒロシをアヤノが引き寄せる。

アヤノ、自分のシャツを引き破る。ボタンがはじけ飛んで、下着が現れる。

いきなりアヤノが悲鳴をあげる。

アヤノ「助けて！」

呆気にとられるヒロシ。

倉庫のドアが開き、黒岩が入ってくる。

黒岩「おまえら何してるんだ！」

アヤノ「助けて。この人が・・・」

アヤノ、黒岩のもとに走っていき、抱きつく。

黒岩「てめえ・・・」

ズボンを下げてそのまま逃げようとするヒロシ。

黒岩、ヒロシを窓際まで追い詰める。

激しく息をするヒロシ。

窓をあけて下に飛び降りる。

○窓の下

車のボンネットではねた後、地面に打ち付けられるヒロシ。
苦しそうにあえいでいる。

○救急車の中

ズボンを下げたままの姿で泣きじゃくるヒロシ。

○黒岩の部屋

ベッドで黒岩とアヤノが裸で横になっている。

黒岩「愉快そうに笑いながら」ほんとに腹痛てえよな。アヤノ、お前さすが
役者だよ。あそこまでやれなんて言っただいぜ」

アヤノ「浮かない顔で」バカだよ。あいつ」

黒岩「まぬけだったよ。二階から落ちても死なねえつつうの。俺あいつの顔
見るだけでムカムカしてたんだよ」

アヤノ「ねえ。今度の土日、本当に何も予定ないよね」

黒岩「ああ。ないよ。どっか行くか？」

アヤノ「・・・一緒に新潟行ってくれない？親が都合いいって言ってるの」

黒岩「（驚いた口調で）親が都合いいだめだよ。金ないし」

アヤノ「交通費だったら私が出すから」

黒岩「ちよつと待てよ。お前展開早すぎるんじゃないの？そういう話はさ・・・」

アヤノ「私のこと本気じゃないの？」

黒岩「そんなことないけど・・・」

アヤノ、落胆した表情でコンドームの箱をさわる。

アヤノ「あっ！」

黒岩「なんだよ？」

アヤノ「数が減ってる・・・ねえ誰と使ったのよ」

黒岩「何言ってるんだお前。減ってないよ」

アヤノ「この間封あけたばかりだよ」

黒岩「だからなんだよ。もう鬱陶しいなあ」

黒岩、アヤノの瀬を向けて寝てしまう。

○集配所、事務所

パソコンのキーボードを叩いているアヤノ。

マニキュアを塗っているマユミ。

その横で所長と若い男が話している。

所長「じゃあ、給料は十五日締めの日払いということで。明日から来てくれるかな」

若い男「わかりました」

所長「ロッカーは右から二番目が空いてるから、そこ使って」

アヤノ「所長。そこはヒロシくんが」

所長「いいよ、あいつは。クビクビ。どうせ使えないんだから」

アヤノ「でも・・・」

マユミ「アヤノ先輩ってヒロシさんのこと好きなんですか？」

アヤノ「何言ってるの?!なんで私があんな奴にほれなきやいけないのよ」

マユミ「似合ってると思いますよ。どうせそんなに男選べないでしょ」

アヤノ「・・・どういう意味？」

マユミ「別に。時々すつとんきようだと思って」

アヤノ、マユミを睨みつける。

マユミ「仕事しましょうよ・・・所長。こっちの計算終わってるんですけど」

○バンの車内

助手席で居眠りしているヒロシ。

運転手、牧野(30)はヒロシを見やると舌打ちをする。

○ヒロシの回想。道

家族の呼ぶ声「ヒロシ、ヒロシ」

走る男の子。四歳のヒロシである。

遠くで手をつないで歩いている父親と母親と妹がヒロシを呼んでいる。

三人を追いかけるヒロシ。転んでしまう。

近寄ってくる父親。ヒロシの前にしゃがむが、手を貸そうとしない。

亨 「ヒロシ、男の子だろう」

自分で立とうとするヒロシ。

黙って見つめる亨。

立ち上がるヒロシ。

亨 「ようし偉いぞ。痛かったか？」

亨、ヒロシの頭をなでる。
回想終わり

○バンの車内

牧野「着いたぞ」

目がさめるヒロシ。

牧野「さっさと行ってこいよ」

緩慢な動きで、車から出て行くヒロシ。

牧野「やる気あんのかよ」

○ファッションヘルス「ティファニー」

おしぼりの入ったかごを持って、店内に入ってくるヒロシ。

下着姿のヘルス嬢リサ(24)がくわえタバコで出てくる。

ヒロシ「おしぼり持って来ました」

リサ「そこらへん置いて。誰かやるから。」

ヒロシ、店で使われたおしぼりの入ったかごを回収する。

吐き気に襲われるヒロシ。客の精液の匂いがきつい。

リサ「(笑いながら) くさい?」

ヒロシ、うなずく。

リサ「くさいよね」

○新橋。繁華街

タキシードを着た亨のかつての友人、川崎(41)が、サラリ

ーマン風の男に声をかけイメクラの呼び込みをしている。

川崎「お遊びのほういかがですか? 八千円ですぐご案内できますよ」

サラリーマンは手を横に振り去っていく。

諦めてきびすを返す川崎。

川崎の目の前にヒロシが立っている。

川崎「ヒロシ。ヒロシだろお前」

ヒロシ「お久しぶり」

頭を下げるヒロシ。

○新橋駅前。SL広場

ベンチに座っているヒロシに川崎が缶コーヒーを持ってやってくる。そのひとつをヒロシに渡す。

川崎「ほら」

黙ってうけとるヒロシ。

川崎「いま何やってるんだよ」

ヒロシ「色々ね」

ヒロシ、コーヒーのプルタブを開けて一口飲む。

ヒロシ「オヤジのいるところ知らないかな？」

川崎「ちよつと待てよ」

ポケットから手帳を取り出して、亨の住所を書き写す。

川崎「まだそこにいると思うぞ。・・・お前ら会ってないのか？」

ヒロシ「川崎さんは会うの？」

川崎「一年ぐらい会ってないな」

川崎、手帳を一枚破り、ヒロシに渡す。

ヒロシ「ありがと（紙に書かれた住所を見る）案外近いんだ」

川崎「昔はあんなじゃなかったんだぜ。足のけがさえなかったらなあ」

ヒロシ「まじめなオヤジなんて全然知らないよ」

川崎「面倒見のいい人だったな。給料が出た日はいつも寿司おごってくれんだよ」

ヒロシ「寿司、好きだったの？」

川崎「お前オヤジの好みも知らねえのか」

○亨のアパート

寿司の折り詰めを持ってやってくるヒロシ。

少し躊躇したあとドアをノックする。

扉が開き、中からミユキが出てくる。

驚くヒロシ。その場に立ちすくむヒロシ。

ヒロシ「・・・」

ミユキ「ヒロシ」

ヒロシ「・・・嘘だろ」

ミユキ「違うの。そんなんじゃないの」

ヒロシ「なんだよ・・・結局、俺だけが仲間はずれかよ」

ミユキ「また昔みたいにみんなで暮らそうって話してたんだよ。本当だよ」

ヒロシ「畜生！俺をコケにしやがって」

ヒロシ、持っていた折り詰めを投げつけ、走り去っていく。
床に寿司が散らばる。

○駅近く

放置自転車の並んでいる道をフラフラと歩くヒロシ。

原付が近づいてくる。
クラクション。
ぼんやりしていたヒロシ、原付をよけようとして、自転車のほうに転倒する。
将棋倒しになって倒れる自転車。
ヒロシ「バカにしゃがってよお！みんなでもよってたかって俺のことバカにしゃがってよお！」

○バスの中。夜

窓から外を見ているヒロシ。
車内に客はヒロシ一人しかいない。
停車するバス。
ヒロシ、料金を払って降りる。
運転手「ありがとうございます」

愛想良くヒロシに礼をいう運転手。
降りてから振り返るヒロシ。

ヒロシ「え？」

誰かが自分に礼を言ったことに耳を疑ったヒロシ。
扉が閉まり、走り出すバス。
その場に立ちつくし、去っていくバスを見送るヒロシ。

○運送会社。前

つまらなそうに立っているミュキ。

○運送会社。中

個人経営の下町の小さな運送会社。
事務所奥の応接用テーブルで、社長(60)と社長の息子である専務(35)から入社面接を受けている亨。
社長は亨の履歴書を読んでいる。

社長「・・・関東運輸に居たんだ。いい金もらってたんじゃないの？うちはあそこほど出せないよ」

亨 「いえ。働かせてもらえるんだったら給料はいくらでも・・・」
再び履歴書に目を落とす社長。
隣に座っていた若い専務が口を開く。

専務 「ひとつ聞いてもいいですか？」
亨 「はあ」

専務 「前の会社をお辞めになったのが七年前ですよね」
亨 「・・・」

専務 「今までの間何をなさってたんですか？」

社長 「そうなんだよ。俺もそれが気になってたんだよね」

亨 「それは・・・」

答えられない亨。

亨の手が激しく震えている。

○亨のアパート

亨 「それが親に対する態度か？なめてんのかお前！」

ミュキの髪を引っ張り、引きずりまわしている亨。

泣きながら抵抗するミュキ。

○同

床に転がる日本酒のビン。

部屋の中はめっちゃめちゃに荒れている。

大の字になって寝ている亨。

部屋の隅で泣きじゃくるミュキ。

○集配所の倉庫

倉庫に入ってくる黒岩。

中ではマユミが待っている。

黒岩、マユミの腰に手をまわすと口を近づける。

笑いながらよけるマユミ。

マユミ 「アヤノ先輩がなんていうかな」

黒岩 「興味ねえよ。あんなババア」

激しくキスをする黒岩とマユミ。

○同・ライン

休憩時間。

止められているラインに油をさしている羽柴（22）。その隣で

床に座ってジュースを飲んでいる野沢（27）

アヤノが急ぎ足でやってくる。

アヤノ 「ねえ、黒岩くん見なかった？」

野沢 「さあ」

アヤノ 「困っちゃうなあ。もう」

アヤノ、あたりを見回す。

野 沢「(羽柴に向かって) 黒岩がいないと困っちゃうんだってさ。お前教えてやったら」

アヤノ「どこ行ったの？」

羽 柴「俺、何も見てませんから。野沢さんが知ってるんじゃないですか？」

アヤノ「(ヒステリーを起こして) どっちなのよ！誰に聞いたらわかるわけ？」

野 沢「(鬱陶しそうに) 倉庫かどつかじゃないの」

アヤノ「倉庫？まだ入庫の時間じゃないでしょ」

野 沢「んなこと俺に聞かれても困るよ」

走り去るアヤノ。

羽 柴「いいんですか？知りませんよ」

野 沢「俺も『世界との距離感』を取らせてくんないかな」

卑猥に笑う野沢。

○倉庫

扉を開けるアヤノ。中に入っていく。

○同。中

暗い部屋の中に入っていくアヤノ。

アヤノ「黒岩くん？いるんでしょ」

激しい息遣いが聞こえる。

近寄っていくアヤノ。

女の足が動いているのが見える。

目を凝らすアヤノ。

黒岩とマユミが裸で抱き合っている。

信じられないことが目の前で起こっている。その場に立ちすく

むアヤノ。

アヤノ「・・・なに、やってるの？」

黒岩、アヤノに気づく。

黒 岩「見てんじゃねえぞ。この野郎」

アヤノ、びっくりして逃げるように部屋から出て行く。

○同。外

倉庫の外。顔を真っ赤にして振るえながら立っているアヤノ。

ふてくされたマユミが乱れた髪を直しながら出てくる。アヤノをバカにしたように一瞥すると大きく鼻息を吐いて去っていく。

ドアが開き、黒岩が出てくる。

黒岩「よお」

去っていくこうとする黒岩。

アヤノ「どういうこと？ねえ、ちゃんと説明して。あの娘といつからああいうふうなの？」

黒岩「お前の知ったこっちゃないだろ」

アヤノ「知ったことじゃないって・・・じゃあ私はあなたの何なわけ？」

黒岩「何だと思ってたんだよ。それから新潟行くの、別の奴誘ってくれよ。」

野沢とかだったら喜んで行くんじゃないか？」

アヤノ「・・・ひどい」

アヤノ、近くに置いてあった消火器をつかみ、黒岩に殴りかかる。

よける黒岩。

消火器が窓ガラスをこなごなにする。

黒岩、アヤノに平手打ちを浴びせる。

消火器がアヤノの手から落ち、黒岩はそれをつかむとアヤノに消化泡をかける。

黒岩、アヤノの髪の毛をつかんで部屋の中に引きずっていく。

○同。中

黒岩に投げ飛ばされるアヤノ。

黒岩、ドアを閉め出て行く。

立ち上がり、顔についた泡を振り払うアヤノ。

○電車の中

アヤノ「しゃぼんだま飛んだ。屋根まで飛んだ」

アヤノ、人目を気にせず歌をうたいながら化粧をしている。

顔にできたあざを気にしながら、ファンデーション厚くを塗りたくっている。

○ヒロシのアパート外

階段を上っていくアヤノ。

○ドアの前

アヤノ、手鏡をのぞきながら、笑顔を作っている。

その顔が気に入らないと次に寂しそうな顔をする。

となりの部屋から男が出てきて、アヤノのそばを通り過ぎる。
アヤノ、あわてて手鏡をしまい、顔をそむける。
アヤノ、男が去っていくのを確認するとドアをノックする。
返事はない。
ドアのノブをまわすと鍵はかかっている。中に入っていくアヤノ。

○ヒロシの部屋

脱ぎっぱなしのシャツ。食べ残したコンビニ弁当などでおそろしく散らかっている。びっくりして一歩下がると洗濯物の山が崩れる。

アヤノ、思い切って万年床に寝転がり、クロールの格好をする。

○同、洗面所

真っ黒なカーテンをはっている。暗室にしているようだ。

電気をつけるアヤノ。

洗面所に現像した写真がおいてある。

その全てはミユキの写真。

アヤノ、それを手にとって見る。

アヤノ「お前、誰だ」

ヒロシのカメラを見つける。

ファインダーをのぞきながら部屋全体を見回した後、自分の足元にむける。

カメラを向けたままスカートをめくる。細いとはいえないがまずまずの足が見える。

シャツターを切るアヤノ。

カメラを自分の顔に向ける。

アヤノ「お前、誰だ」

フラッシュ。シャツターを切ってしまった。目をつぶるアヤノ。

カメラをしげしげと見つめる。

アヤノ「ま、いいか」

○バー

カウンターで酔いつぶれているアヤノ。

グラスを持ったメガネの男(33)が隣に座る。

メガネ「面白くなさそうだね」

アヤノ「うるさい」
メガネ「そのうちいいこともあるよ」
アヤノ「そのうちっていつよ。明日？あさって？」
メガネ「そのうちだよ。来ると思えば来るし、来ないと思っていれば来ない」
アヤノ（大声で）「いつになつたら私にいいことがあるのかって聞いているの。答
えられないんだつたら、どっかに行っちゃってくれる？」
メガネ「怒らなければいい女なんだけどなあ」
アヤノ「あんたサイテー」
メガネ「ありがと」

○ホテル

ベッドの上で目が覚めるアヤノ。
隣にはメガネが眠っている。
アヤノあわてて布団の中を見る。
アヤノ、大きくため息。下着はつけていなかった。

アヤノ「ま、いいか」

アヤノ、メガネの背中を下敷きにして、紙に自分の電話番号を
書く。

メガネが目を覚ます。

メガネ「あ・・・今何時？」

アヤノ「え？」

アヤノ、あわてて時計を探し、メガネに渡す。

メガネ「やつべえ」

あわてて起き上がりシャツを着るメガネ。

アヤノ「もう終電ないよ」

メガネ「タクシー拾う。帰らないの？」

アヤノ「まだいる」

メガネ「あつそう」

立ち上がるメガネ。

メガネ「じゃあ、電話するよ」

急いで部屋から出て行くメガネ。

アヤノ「電話するよ・・・か」

自分の電話番号の書かれたメモを破る。

○道

誰もいない真夜中の通りをケンケンパするアヤノ。

アヤノ「ま、いいか。私なんか、ま、いいか」

○アヤノのマンション。エレベーターの中

全ての階のボタンを押すアヤノ。

2階で止まるとエレベーターから降りて、階段を駆け上がって行く。

ハイヒールの足が折れてつまずく。

アヤノ、裸足になって走りだす。

○同、3階

エレベーターが待っている。

アヤノ、再びエレベーターに乗り「閉」ボタンを押す。激しく息をするアヤノ。

4階に着くと、またエレベーターから降りて、階段を駆け上がる。さつきより足取りは重い。

○同。5階から6階

階段を上って五階に来るアヤノ。

エレベーターのドアは閉まっていて、掲示板は「6」のところが光っている。

仕方なく階段を歩いて上っていく。

歌をうたうアヤノ。

アヤノ「しゃぼんだま飛んだ。屋根まで飛んだ」

中間地点で立ち止まり夜景を眺める。

遠くで貨物列車の走る音。街の光りが揺れている。

歌声がアヤノの母親の声になる。

歌 声 「屋根まで飛んで、こわれて消えた」

とぼとぼと歩き出すアヤノ。寂しそうな背中。

6階に着く。

顔を上げるアヤノ。足が止まり、表情が少し緩む。

アヤノの部屋の前でヒロシがひざを抱えて座っている。

アヤノ、ヒロシに近づいていく。

アヤノ「猫がいる。凍えた子猫ちゃん」

力が抜けたように鼻で笑うヒロシ。

ヒロシ、アヤノに写真を渡す。

アヤノがヒロシの部屋で撮った写真は、目をつぶりまぬけな顔

をしている。

アヤノ、ドアを上げるとヒロシを中に入れる。

○アヤノの部屋

ベッドで裸で寝ているヒロシとアヤノ。

ヒロシはうつぶせになり枕に頭を押し付けている。うまくいかなかったのだ。

寝転びながら煙草をふかしているアヤノ。

ヒロシ「ごめん。・・・アヤノさんに魅力がなかったわけじゃないんだけど」

アヤノ、煙草の火を消す。

アヤノ「よくあることよ。初めてだったんでしょ」

ヒロシ「やっぱり、俺ってだめな人間なのかな」

アヤノ、ヒロシの髪の毛をなでる。

アヤノ「そんなふうに思ってたなら、ますますだめになるわ。ヒロシくん優しいのよ。女の子を妊娠させないようにって気を使ってる」

ヒロシ「そんな・・・(笑う)」

アヤノ「今度はきつとうまくいくから」

ヒロシ「(大きくため息をついて) のど、かわいたな」

アヤノ「ポカリならあるよ。持ってきたげるね」

アヤノ、体にシーツを巻いて起き上がり、冷蔵庫に行く。

ヒロシ、部屋を眺める。所狭しと張られた映画のポスター。

ヒロシ「すごいね。映画好きなんだ」

アヤノがジュースの入ったコップを持って戻ってくる。

「欲望という名の電車」のポスターを見つける。

ヒロシ「俺、これ見たよ」

アヤノ「どうだった？」

ヒロシ「うーん、つまんなくはないけど・・・よく分かんなかったな」

アヤノ「この映画大好きなんだ。何回も見てる」

ヒロシ「どこがいいの？あんな暗い話」

アヤノ「あのね、私、昔役者だったんだ」

ヒロシ「うそ？」

アヤノ「小さい劇団よ。お客さんも二十人ぐらいしか入らないの。一回きりだけど主役張ったこともあるんだ」

ヒロシ「へえ、見てみたいな」

アヤノ『アヤノは綺麗だから、大人になったら女優になれるよ』ってママによく言われた」

ヒロシ 「なればよかったのに」
アヤノ 「(フッフと笑って) そうだね。なればよかったね」

○亨の部屋

部屋の隅でテレビを見ているミュキ。

亨、台所でカレーを作りながら、ときどきちらっとミュキ見る。

亨、わざと明るい声で

亨 「できたできた」

食卓に皿を置く亨。

亨 「今日はミュキの大好きなカレーだぞ」

動こうとしないミュキ。黙っている。

作り物の明るさが虚しく響く。

亨 「ほら、おいしいぞ。あったかいうちに食べよう・・・」

ミュキ、亨を見る。

怒りを通り越して、あきらめの表情。

亨、持っていたスプーンを置き、ミュキを見つめる。

亨 「・・・」

謝りたいが、もうそんなものは信じてもらえないだろう。

何も言えず、うなだれる亨。

立ち上がるミュキ。何も言わず部屋から出て行く。

○道

歩いているミュキにベンツが近づいてきてクラクションをならす。

高級そうなスーツを着た男(40)が声をかける。

ベンツ 「乗らない？暇なんだろう」

男をちらりと見た後、何も言わず歩きつづけるミュキ。

ベンツ 「つまんなそうだね」

ミュキ 「だからなに？」

ベンツ 「美味しいもん食べに行こう。ちょっとはスカっとするぜ」

ミュキ 「おなかすいてないもん」

ベンツ 「じゃあ、ドライブ行こう。どこ行きたい？」

ミュキ 「どこにも行きたくない」

ベンツ 「とにかく乗りなよ。そんなとこ歩いてたって一生つまないままだぜ」

男を無視するミュキ。

○ホテル

ミユキの体を愛撫するベントツ。
ミユキはつまらなそうに天井を見ている。

○同

洋服を着ているベントツ。
ベッドから出ようとしないミユキ。
ベントツ、財布から一万円札を四枚出し、ミユキに差し出す。

ミユキ「え？」

何のことかわからず、黙って金を見つめるミユキ。
ミユキが不満に思っていると思ったベントツはもう一枚一万円札を出し、ミユキの手に握らせる。
自分が売春をしたことを認識したミユキ。金を持った手を握りしめる。

○街

五万円を握り締め、憂鬱そうに歩くミユキ。
シャツターを閉めようとしていたブティックに滑り込む。
仕方ないという顔をする店員。

○店の中

ミユキ、男性もののジーンズをいくつも広げてサイズを確かめる。
床には散乱するジーズ。うんざりしている店員。
気に入ったジーンズを見つけると、次は同じようにセーターを散らかしながら選ぶ。
気に入ったセーターを見つけたミユキ。
金を支払うミユキ。
ジーンズとセーターで二万八千円。

○道

ミユキ、自動販売機で花束を買う。

○コンビニエンスストア

ミユキ、スナック菓子や弁当を大量に買う。

○ヒロシのアパート

両手いっぱい荷物を持って階段を走り上るミュキ。自分の体売って得た金を全て使い果たして、ヒロシへのプレゼントを買ったのだ。

ドアには鍵がかかっている。中に入っていくミュキ。

ミュキ「ヒロシ・・・ヒロシ」

明かりがつき、上半身裸のヒロシが出てくる。ミュキを睨みつけ何も言わない。

ミュキ「ヒロ・・・」

中から下着姿のアヤノが出てくる。

アヤノ、背中からヒロシに腕を巻きつける。

アヤノ「だあれ、この娘？」

ミュキ「・・・」

何も言わずにミュキを睨みつけるヒロシ。

ミュキ、きびすを返しアパートから出て行く。

○アパート前の道

とぼとぼと寂しそうに歩くミュキ。

ヒロシ「おい！」

振り返るミュキ。

ヒロシが近づいてくる。

ミュキ笑顔になる。

ヒロシ、げんこつでミュキをなぐりつける。

ミュキ、倒れながら、持っていたものをヒロシに差し出す。

ヒロシ、それを受け取って中身を見ると、下に置き、再びミュキを殴る。

口から血を流しながらヒロシを見るミュキ。

部屋に去っていくヒロシ。

○ヒロシの部屋

ヒロシ、アヤノの待っている布団にもぐりこむと、アヤノに瀨を向ける。

アヤノ「今の昔の彼女？」

ヒロシ「誰でもいいだろ」

アヤノ「ねえ、誰よ？白状しなさい。いい子だから」

アヤノ、ヒロシの背中から腕をまわす。

アヤノ「続きしようよ」

ヒロシ、アヤノの手を振りほどく。

ヒロシ「ごめん。今日もだめだ」

アヤノ「こんなおばさんじゃ嫌？」

ヒロシ「人間の匂いがするんだ。お前の肉の匂いがたまらなく気持ち悪いんだ」

○道

休憩時間

止めたバンにもたれて空を見ているヒロシ。

○ファッションヘルス『ティファニー』店内

待合室で待っているヒロシにボーイが近づく。

ボーイ「大変お待たせしました。リサちゃんご案内いたします」

ボーイ、ヒロシを連れ、入り口のカーテンを開ける。

中にはリサがいる。

リサ「リサです。ご指名ありがとうございます」

○同、個室

ベッドに座っているヒロシ。

コスチュームを脱いでいるリサ。

リサ「お客さん、前に来たでしょ。なんとなく覚えてるよ」

ヒロシ「来てないよ」

リサ「ここ来るのはじめて？」

ヒロシ「うん」

リサ「嘘。じゃあ人違いかな。絶対どっかで会ってるよ」

ヒロシ「・・・」

リサ「脱がないの？」

ヒロシ「いや・・・いいんだ」

リサ「シャワー浴びないと・・・」

ヒロシ「だからさ・・・話さない？」

ヒロシは誰とでもいいから話がしたいと思ってここに来たのだ。

リサ「いいの、しなくて？」

ヒロシの隣に座るリサ。

リサ「何話す？」

ヒロシ「だから・・・」

黙り込むヒロシ。話すことが何も無い。

リサ「へんなの」

○アヤノのマンション。キッチン

アヤノ、キッチンのテーブルに座ってワインを飲んでいる。

一方的にしゃべるアヤノ。

アヤノ「私ね、小さい頃転校してばかりいたの。どんなに仲良しになっても、いつかこの子の前からいなくなるんだろうなって……」

食器を洗っているヒロシ。

アヤノ「あまり好きにならないほうがいいって、だってショックが大きいでしょ。ああいうのって親から急に言われるからさ……」

ヒロシはアヤノの話を全く聞いていない。

アヤノ「ねえ、聞いている？ヒロシ」

ヒロシ「え？なんだっけ？」

アヤノ「……つまらないよね。こういう話……やめるね」

ヒロシ「あのさあ……」

アヤノ「何？」

ヒロシ「俺たち、終わりにしない」

アヤノの体中から力がぬけていく。

アヤノ「……なんで？」

ヒロシ「アヤノさんと一緒にいればいるほど、自分はだめな人間なんだって思うんだ」

アヤノ「私のこと嫌いになった？」

ヒロシ「これ洗い終わったら、出て行くよ」

アヤノ「(疲れた声で) やっぱりヒロシもいなくなっちゃうんだ。」

水道の音が止まる。

アヤノ「静かに、しかし切実に) ここにいようよ。私のことお姉さんってことにして、別の女の子連れてきてもいいからさ。ここにいて。お願い」

ヒロシが出て行く音。

部屋にひとり残されたアヤノ。

○集配所。廊下

毅然と歩くアヤノ。

従業員Aの声「この間辞めた、やたら暗い奴いたじゃん。今度はあいつと付き合ってるんだってさ」

従業員Bの声「何人男代えりゃ、気がすむんだよ」

○同。中庭

休憩時間。

仲間に加わらず、一人でパンを食べている新人(23)。
従業員Cの声「この職場、兄弟だらけだな」

新人に声をかけるアヤノ。

アヤノ「あなたは世界との距離感がつかめていないのよ」

○亨の部屋

鏡台の前に座り化粧をしている亨。

寝ていた亨が起きだす。

亨 「出かけるのか？」

答えないミュキ。

亨 「毎晩、どこに出かけてるんだ」

ミュキ 「男の人に裸にされるところでお金貰うの」

亨 「お前、よくも」

立ち上がってミュキの前に立つ。

ミュキ 「殴るの？殴れば」

亨、握ったままこぶしを下ろす。

亨には目もくれず、部屋から出て行くミュキ。

○ラブホテル

全景。

○同。リネン室

十二畳ほどの従業員控え室。

ミュキは部屋の隅でジュースを飲んでいる。

電話がなり、同僚のマチコ(47)が受話器をとる。

マチコ 「はあい」

受話器を置くと、ミュキに声をかける。

マチコ 「ヴェルサイユ」

立ち上がるミュキ。

○同。「ヴェルサイユ」の間

ベッドメイキングの道具一式を持って、お城のような部屋に入ってくるミュキとマチコ。客が使った部屋を清掃にきたのだ。

マチコ、浴室をのぞく。客が使った形跡がない。

マチコ「ラッキー。使っていない」

ベッドを見たミュキ。憂鬱な顔になる。

ミュキ「あーあ」

ベッドを見ると、生理の客が使ったらしく、血だらけになっている。

ミュキ、そのシーツをたたむ。

ぐによ、という感触が足の裏に。顔をしかめるミュキ。

ミュキ「やっちゃった」

マチコ「もしかして、あれ？」

ミュキ、ティッシュを2枚ほど取ると、足の裏についた使用済みのコンドームを取って袋の中に捨てる。

ミュキとマチコ、ふたりがかりで新しいシーツを敷く。

マチコ「前から聞こうと思ってたんだけどさ、あんたなんでこんなところで働いてるの？」

ミュキ「さあ」

マチコ「もつとましな仕事あるでしょ。若いんだから」

掃除機をかけようとするミュキ。

マチコが客の忘れた大人のおもちゃをミュキに渡す。

マチコ「はい、忘れ物」

ミュキ、シールに「ヴェルサイユ」と書いて、大人のおもちゃにはり、忘れ物を入れる箱の中に入れる。

○同、リネン室

部屋のすみでジュースを飲みながら休憩しているミュキ。無気力でうつろな表情。

誰かが中に入ってくるが、ミュキは振り返ろうとしない。

ヒロシの声「シーツ持ってきましたけど、どこに置けば・・・」

ミュキ「そこらへんに置いといて」

声の主は動こうとしない。

ミュキ「だから置いといてよ（顔をあげる）」

目の前にヒロシが立っている。

ミュキ「・・・ヒロシ」

ヒロシ「これがそうか？」

ミュキ、うなづく。

ヒロシ、客の使ったシーツの入ったかごを持って

ヒロシ「この間は・・・痛かったか？」

ミュキ、答えない。

ヒロシ「久しぶりにごはんでも食べないか？」

ミュキ「終わったら出てつてよ。シート屋さん」

ヒロシ、出て行こうとする。

扉をあけたところで立ち止まるヒロシ。

ヒロシ「ミュキ」

ミュキ振り返ってヒロシを見る。

ヒロシ、作業服のフアスナーを下ろす。

ミュキが贈ったセーターを着ている。

ヒロシ「これ、暖ったかいよ」

寂しそうに微笑んでヒロシ出て行く。

○同。店の外

使ったシートを入れたかごを持ち、車に戻っていくヒロシ。

○同。リネン室

うつろな表情のミュキ。

いきなり立ち上がり、着替え始める。

○同。フロント

店から出て行こうとするミュキ。

マネージャー「おい、どこ行くんだ」

ミュキ「おなか痛いのに」

マネージャー「まだ終わってないんだよ！」

店から出て行くミュキ。

○同。駐車場

階段を走って降りると、リネンサービスのバンが止まっている。

ミュキ、車に駆け寄るが、中には誰もいない。

あたりを見回すミュキ。

壁にもたれながらミュキを見ているヒロシを見つける。ミュキ

と目が合うと静かに笑うヒロシ。

ミュキ、自分の匂いを気にして右腕を鼻に近づけたあと、ゆっ

くりヒロシに向かって歩いていく。

ヒロシ「仕事は終わったのかよ」

ミュキ「いいでしょ。どうでも」

ヒロシ「つまらなそうなことやってるんだな」
ミュキ「ヒロシだってそうじゃん」

ヒロシ、懐かしそうにミュキの頬をなでる。

ヒロシ「元気だった？」

ミュキ「ヒロシは？」

首を横に振るヒロシ。

ヒロシ「だめだよ。何をやっても全然だめだ」

ミュキ「痛かったよ」

ヒロシ「え？」

ミュキ「すっごく痛かった」

申し訳なさそうに目を伏せるヒロシ。

ヒロシ「なあ、久しぶりにあれやってみないか？」

ミュキ「嬉しそうに）あれ？やってみよっか？」

車を置いたまま、歩き出すヒロシとミュキ。

○コンビニエンスストア。外

ミュキ、駐車場に立ち、店内にいるヒロシの動きを見ている。

○同。店内

アイスクャンディーを片手に持って、目立つように店内をぐるぐる回るヒロシ。

店員がヒロシをマークする。

ヒロシ、金を払わず出て行こうとする。

店員「お客さん。ちよっと！」

いきなり走り出すヒロシ。

入り口のところでミュキとぶつかる。

ヒロシ「気をつけろ！」

逃げていくヒロシ。

追いかける店員。

それを見ているミュキ。右手にアイスを持っている。

○道

走るヒロシ。まるで何かから解放されたかのように、晴れ晴れとした顔をしている。

○公園

ミュキがやってきてヒロシを探す。
暗闇の中に人影がひとつ。

ミュキ「ヒロシ・・・ヒロシでしょ」

人影に歩み寄っていくミュキ。

人影がミュキのほうに歩いてくる。

ライトが人影にあたり、ヒロシの顔が浮き上がる。

ミュキ「ヒロシ」

ヒロシ「ミュキ」

ミュキ、ヒロシのもとに走り寄る。

ミュキ「ほら」

盗んだアイスヒロシに差し出す。

興奮しているふたり。

ヒロシ、ミュキに一口かじらせてから、自分でかじる。すると

アイスのかたまりが割れて地面に落ちる。

ヒロシ、それがおかしくて笑い出す。

ミュキもつられて笑い、口に入れたアスを吹き出してしまう。

ヒロシ「きったねえ」

さらに大きな声で笑うふたり。

ヒロシ、真顔になる。

ヒロシ「ミュキ」

見つめ合うふたり。

ヒロシ、ミュキを抱きしめる。

ミュキ「ヒロシ」

ヒロシ「ずっとさ、たまらない気持ちだった・・・もうどこにも行くなよ」

ミュキ「行かないよ。もうどこにも」

ヒロシ「またさあ、一緒に楽しいことしよう。ずっと、ずっと、したいことだ

けして生きていこう」

ミュキ「ごめんね、ヒロシ」

ミュキ、ヒロシの胸に顔をうずめる。

ミュキ「ごめんね、ヒロシ」

○電車の中

ヒロシの肩にもたれてミュキが眠っている。

離れたところで酔っ払った学生たちが騒いでいる。

○アヤノのマンション。夜

ビデオを見ているアヤノ。コメディだがくすりとも笑わない。
エレベーターから誰かが降りる音。

足音が近づいてくる。

アヤノ、立ち上がり玄関のほうに歩いていく。

耳をそばだてるアヤノ。

足音が止まる。

玄関のベルがなる。

出ようとしないアヤノ。

何度もなるベル。

アヤノ「だれ？」

ヒロシ「ヒロシだよ。開けてよ」

アヤノ「・・・帰って」

沈黙。

去っていく足音。

おそろおそろドアを開けるアヤノ。

ヒロシの足がドアの隙間にすべりこんでくる。

アヤノ、ドアを閉めようとするが、ヒロシの右手が留め金をはずす。

アヤノ、抵抗するがヒロシの力には叶わず、ドアは開けられヒロシが中に入ってくる。

アヤノ「出てって。お願いだから」

ヒロシ「結婚しよう。俺が間違ってたよ」

アヤノ「なに言ってるの？あんたおかしんじゃないの？」

ヒロシ「アヤノさんが必要なんだ」

ヒロシ、アヤノを抱きしめる。何か言おうとするアヤノの唇をふさぎ、そのまま押し倒す。

ヒロシ「本当は俺が欲しかったんだろ。欲しくて欲しくてたまらなかったんだろ」

アヤノ、抵抗するがそのままヒロシに崩れていく。

アヤノ「私、そんな女じゃない。みんなが言うような女じゃない」

○同。ベッドルーム。翌朝

目が覚めるアヤノ。

隣にはヒロシはいない。

台所から物音が聞こえる。

○同。キッチン

アヤノがキッチンに来るとヒロシが朝食を作っている。
ヒロシ「起きた。もうすぐできるよ」

アヤノ、テーブルに座る。

ヒロシ、トーストとコーヒーとハムエッグを並べる。

アヤノ「・・・昨日はよかったよ」

ヒロシ、照れ笑いする。

コーヒーをすすめるアヤノ。

アヤノ「でも冗談なんですよ。あの話」

ヒロシ、アヤノの前に座る。

ヒロシ「冗談じゃないよ。来月にでも一緒に新潟行こう」

アヤノ「本気で言ってるの？」

ヒロシ「アヤノさんの親に挨拶してさ、そのあと二人でいろいろまわろうよ。

どんなところ？」

アヤノ「なんにもないところだよ。雪ばかりで、やることもなくて、いるのも嫌な奴ばかりで・・・大嫌い。あんなところ。見るところなんてないよ」

ヒロシ「観光地じゃなくていいからさ、アヤノさんの好きな場所に連れてって

よ。きっと俺も気に入るからさ」

アヤノ「信じていいの？」

ヒロシ「愛してるよ」

アヤノ、ヒロシの手を握る。

アヤノ「・・・愛してるよ」

○公園。夜

ミユキから貰った赤いセーターを着た亨がベンチに座っている。

暗闇の中から足音が近づいてくる。

亨、立ち上がり足音のするほうを見つめる。

灯りがあたりアヤノの顔が現れる。

亨、ベンチに座りこみ、顔をそらして大きく息を吐く。

アヤノ、亨の隣に座る。たばこを取り出す。

アヤノ「おじさん。火貸して」

亨「やめたんだ」

アヤノ「来ないよ。ヒロシもミユキも」

亨「え？・・・なぜ？」

アヤノ「来たくないって」

亨 「そうか・・・謝ろうと思ってたんだけど。やっぱりだめか。

・・・悪いんだけど、これあいつらに渡してくれないかな」

亨、アヤノに封筒を渡す。

アヤノ、亨の手を握る。

アヤノ 「いつかきつと許してくれるよ」

首を横に振る亨。

亨 「俺はバカだからまた同じことを繰り返す」

アヤノ 「本当はふたりともお父さんがほしいんだよ。まだ遅くないから」

アヤノ、亨の手を自分の胸に持ってくる。

アヤノ 「やわらかいでしょ」

亨 「ちよつと・・・」

アヤノ 「大丈夫。私がやさしくしてあげるから」

アヤノ、亨にキスをする。

アヤノ、亨の手を取り、ベンチ裏の茂みに導く。

○同。ベンチ裏の茂み

アヤノ、自分のブラウスの胸元を破いて、亨の顔を引き寄せる。

亨 「畜生・・・」

アヤノ 「かわいそうに」

亨を抱きしめるアヤノ。

アヤノを愛撫する亨。

遠くを見ているアヤノ。

亨の背中に男の影が差す。

アヤノ、いきなり大声を出す。

アヤノ 「助けて！」

男の手が亨の肩をつかむ。

二人の警官が立っている。警官Aが亨を押さえる。

アヤノ、警官Bに抱きかかえられる。

信じられないという表情の亨。

○警察

取調室で必死に自分の無罪を主張する亨。

亨 「本当に違うんだ。むこうから誘ってきたんだ」

○同。別室

マジックミラー越しに亨が見える。

女性警官に供述するアヤノ。ブラウスがびりびりに破れている。アヤノ「あの男です。間違いありません。いきなり押し倒されて……」

○道

アヤノのマンション前に車が止まる。

刑事「近いうちにまた署のほうに来て頂くことになると思います。調書は外部にもれることは絶対ありませんから、ご安心ください」

車から降りるアヤノ。

車が去っていくのを見届けると、マンションとは別の方に向かって走り出す。

○道

走るアヤノ。

アヤノの声「子供は多いほうがいいな。できれば三人欲しい。男の子二人に女の子ひとり。別に大きな家にすまなくてもいいの。一生団地住まいでもいいんだ。でもね、子供たちには何か楽器を習わせてあげたい。それでみんなで演奏会して歌うの。いいでしょ。犬と猫どっちが好き？私は犬がいいな。ラブラドル・レトリバーが飼えたら素敵なんだけど……。無理かな？そんなの。無理ならいいんだ」

○ヒロシのアパート

アヤノ、階段をかけのぼり、ヒロシの部屋のドアを叩く。反応はない。

ノブに手をかけると鍵は掛かっていない。

アヤノ「ヒロシ？いるんでしょ」

アヤノ、中に入っていく。

電気をつける。

部屋の隅に置き去りにされた母親の遺骨。

それ以外のものは全てなくなっている。

アヤノ「ヒロシ……嘘だよね！」

その場にしゃがみこむアヤノ。

アヤノ「嘘つきイ！」

泣き崩れるアヤノ。初めて見せるアヤノの涙。

○街。夜

全景。夜の都会

○ターミナル駅近くの路上

黒岩が一人で歩いている若い女に声をかけている。

黒岩「ねえねえねえ、どこ行くの」

無視して歩きつづける女。

黒岩「何やってる人？学生？働いてるの？」

女「・・・」

黒岩「よかったらそのへんで話でもしない？」

黒岩を避けるように足早に去っていく女。

女に向かって言葉をつき捨てる黒岩。

黒岩「お高く止まるんじゃねえぞ！ブスのくせに」

ミュキ「あーあ。振られちゃった」

黒岩が声のした方を向くと地べたに座っているミュキが笑っている。

黒岩、ミュキのもとにやってくる。

黒岩「そんなところで何してるの？」

ミュキ「別に。退屈してるの」

黒岩「だったら俺と遊ばない？」

ミュキ「いいよ」

黒岩「なにして遊ぶ？」

ミュキ「おじさんの好きなことしよう」

黒岩「・・・」

ミュキいたずらっぽく笑う。

黒岩、あたりを見回したあとミュキの耳元でささやく。

黒岩「いくら欲しいの？」

ミュキ、両手を広げる。

黒岩「それは高いよ」

黒岩、三本指を立てる。

ミュキ「じゃあ・・・」

ミュキ、四本指を立てる。

黒岩「いいよ」

ミュキ、立ち上がる。

○道

黒岩、ミュキの腰に手を回して歩いている。

黒岩「君いくつなの？」

ミュキ「さあ、いくつでしよう」

黒岩「高校生？」

ミュキ「ピンポーン」

黒岩「本当？近頃の娘は発育がいいねえ」

黒岩、ミュキの尻を触る。

ミュキ「まだだめ。こうこいうことは後で」

黒岩「悪い手だ。ぺんぺん」

ミュキ「ねえ、外でやらない？ホテル飽きたよ」

黒岩「じゃあ公園行こうか？」

ミュキ「いいよ」

○公園

人気がない場所。高層ビルが見える。

木の陰にミュキと黒岩。

黒岩、ミュキの胸に顔をうずめる。

ミュキの胸をわしづかみにしながら

黒岩「君、胸大きいね」

ミュキ「・・・」

黒岩「まだ硬いよ。本当に十代なんだ」

黒岩、ミュキの胸のボタンをはずし始める。

突然、うしろから黒岩の顔に布袋がかぶせられる。

棒を持ったヒロシが黒岩を殴りつける。

倒れる黒岩。

ヒロシ「この変態野郎」

さらにヒロシ、黒岩の腹、顔を殴りつづける。

ミュキ「気持ち悪いんだよ。クソオヤジ」

ミュキも黒岩の顔を蹴る。

ヒロシ「害虫が！」

血だらけになり動かなくなった黒岩。

ミュキ、黒岩の上着をさぐり財布を取り出す。

財布の中身をヒロシに見せる。中には一万円札の束。

ミュキ「すごいよ。こいつこんなに持つてるよ」

ヒロシ「よし行こうぜ」

走り出すふたり。

○同

○高速道路

停めてあったバイクに乗るヒロシ。
ミユキを後ろに乗せ、エンジンをかけ発進する。

ものすごいスピードで走るバイク。
ヒロシとミユキの恍惚とした表情。
どンドン上がっていくスピードメーター。

スローモーション

映像のミユキの口の動きにあわせて

ミユキの声「(ささやくように) 飛ばせ、飛ばせ」

さらにアクセルをふかすヒロシ。

ミユキの声「死・ぬ・ま・で・飛・ば・せ」

スローモーション終わり。

ふたりを乗せたバイク、轟音と共に闇の中に消えていく。
タイトル「ふたりだけの二人」

終